

4、「驚き」の心

時は、桜の季節からつつじ、そしてさつきの季節へと移ってきた。冬の厳しさに枯れたかに見えていた草木も、いまは緑こまやかに、青く生い茂るを喜んでいるかのようである。それは、苦しい受験競争に耐えて、みごとに難関を突破し、いまは大学のキャンパスで、青春をおう歌している学生の姿にも似ていよう。

しかし、大学に入学はしたものの、月日がたつにつれて、講義にもクラブ活動にも、興味を失い、やる気をなくした、いわゆる五月病というスランプ状態に陥った学生もかなりいるのである。これは、教える方の授業の内容や方法にもよろうが、学生自身の授業を受ける心がけにも問題があるろうと思われる。学生が授業を受けるのに、ただ、その内容を記憶さえしておけばよかった時代は既に過ぎた。たしかに、欧米の学問や文化に追いつくことを急務とした



昭和48年 北海道研修旅行（阿寒）

時代には、教授から授けられた知識を記憶さえすればそれでよかつたであろう。記憶してまねをしておれば、それだけで欧米の学問や文化に近づけたのである。

しかし、今や、わが国の学問や文化は、欧米に追いつきそれを超えようとさえしている。どうして、記憶するだけの授業でよいであろうか。申すまでもない、ここで大切なことは、記憶しまねすることではなく、理解し創造していくことである。そして、そのためには「驚き」の心をもって臨むことが肝要であろう。驚きの心をもって、進んで講義を聴き、そこから究めていけば、必ずや、真理に遭遇もし、新しい学問の創造にもつながろう。そこには、喜びと感動こそあれ、無気力なスランプ状態に陥ることはないのである。

翻ってみれば、私たちの四周は神秘と不思議の世界といえる。その神秘の世界を驚きの心で見つめれば、そこには美があり、善があり、真理も見いだせよう。

俳聖芭蕉に「ふと見ればなすな花咲く垣根かな」の句があるが、これは、見すごされやすいべんべん草にさえ目をとめて、驚くことのできる芭蕉にしかよめない句だと思ふ。こうして、驚きの心をもつところから俳句は生まれるのであるが、学問も文化もそこから創造されると思ふのである。

さつきの花咲く生氣あふれる季節である。学生といわず私たちも無気力な生活から脱却しよう。それには「驚き」の心をもつことである。驚きの心をもち、自ら進んで真・善・美を求めることが大切である。さすれば、そこに、生命の躍動する未来が創造されるはずである。